

- 文部科学省 初等中等教育局長寄稿 1面
- 座談会 これからの日本書芸院を考へる 2~6面
- 大学生の書道パフォーマンス 7面
- インタビュー 「書」における対話型鑑賞の可能性を聞く 8・9面
- 大阪・関西万博で「未来へつなぐ日本の書」開催 10面
- 第21回手書き文字ばんざい! 11面
- シルバー展報告 12面

第19号

「伝統と創意」

広報紙 書くよろこび

令和8年(2026年)4月発行

私たちは児童生徒一般すべての人々の書写の環境を整え、豊かな心を取りもどすため総力をあげて「手書き文字の振興」に取り組んでいます。



私たちは「日本の書道文化」のユネスコ無形文化遺産登録を応援しています。



- 一、日本の伝統文化芸術を守り育む
- 一、すばらしい日本語の心を伝えよう
- 一、心を映す文字をより大切にしよう
- 一、書く楽しさ喜びを通して健やかな心を養おう
- 一、美しい文字で潤いのある豊かな人生を送ろう

豊かな心は手書き文字から

寄稿

文部科学省
初等中等教育局長

望月 禎 氏



デジタル生かし
リアルな学びを

科書道では、表現と鑑賞を通して、我が国の文字文化の深さや美しさを実感的に学ぶ機会が設けられています。こうした学びはまさに「身体を通して心を表す」営みであり、人間ならではの表現の価値と言えるでしょう。

次期学習指導要領の改訂に向けた審議が進められていますが、デジタルカリアルかといった一対立に陥ることなく、デジタルの力を生かしてリアルな学びを支えるというバランス感覚を大事にしたいと考えています。

社会のデジタルトランスフォーメーションが進み、日常生活や学びのあらゆる場面にデジタル技術が浸透する中で、私たちは文字を「手で書く」という行為の意味を改めて見つめ直す時期を迎えています。手書きには人の思いがにじむぬくもりがあり、単なる情報伝達にとどまらないコミュニケーションの価値があります。

一方、GIGAスクール構想により児童生徒一人一人に端末が整備され、ICTを活用した書写指導の工夫も広がっています。動画で筆運びを確認したり、自分の書いた文字を撮影して振り返ったりすることで、主体的に学びを深める姿も見られ、デジタルの強みを生かした学びの可能性が広がっています。現在、今後とも、日本書芸院の活動が、我が国の伝統的な文字文化の継承と発展に一層寄与されることを心より期待しております。

文字・活字文化振興法の骨子

- 【目的】 文字・活字文化の振興策を推進し、知的で心豊かな国民生活および活力ある社会の実現に寄与する。
- 【基本理念】 国民が等しく豊かな文字・活字文化の恵みを受ける環境を整備する。国語が日本文化の基盤であることに配慮する。学校では「言語力」を高める。
- 【責務】 国や地方公共団体は文字・活字文化の振興策を策定し、実施する責務がある。
- 【地域の振興】 市町村は公立図書館を設置する。
- 【国際交流】 国や地方公共団体は司書の充実など人的体制を整備し、資料の充実を図る。学校図書館を開放する。
- 【国際交流】 文字・活字文化の海外への発信を促進。翻訳の支援をする。
- 【文字・活字文化の日】 国民の関心と理解を深めるため、十月二十七日を文字・活字文化の日とする。

第19号 書くよろこび 座談会

これからの日本書芸院を考える



日本書芸院は昭和21年の創立以来、「伝統と創意」を基本理念に掲げ、「書」の本質的な研究を通して、わが国の文化の継承、振興、発展のために活動し、令和8年、創立80周年を迎えます。この間、小学生からシルバード世代まで、全世代を網羅する書道展や、一般の方々にも興味を持っていただける企画展、各種講習会・講演会などを開催して、「書」の啓蒙と普及、後進の育成に力を尽くすとともに、地域の生涯学習にも寄与してきました。

土橋 先生方、大変お忙しいところ今日はお集まりいただきまして本当にありがとうございます。今日は、「これからの日本書芸院を考える」という題で、先生方に忌憚なく意見を伺いたいと思っております。お越しいただきました。

日本書芸院は来年で80周年を迎えます。月の教養講座では、大東文化大学教授の高橋利郎先生にお出ましいただきまして、パネリストとして真神麗堂先生、真鍋井蛙先生、そして山根互清先生に、80周年を振り返るというところで、いろいろお話を聞いていただきたいと思っております。教養講座での先生方のご意見、お話を過去を振り返っていただいております。

しかし、今回は、比較のお若い先生に日本書芸院のこれからをどうしたらいいかということを考えていただきたいと思っております。このテーマを選び、そして先生方にお集まりいただいたわけがございます。

書芸院は、振り返りますと、昭和21年の11月24日に、辻本史郎先生を中心に「日本書道院」という名前で、戦後文化、日本再建の機運の高まりに乗じて、書もこれから皆で頑張っていこう、ということでも結成されたそうです。

そのうち、昭和24年2月23日に社団法人の「日本書芸院」ということで改称されまして、それから長らく今日に至っております。

1990年代には会員数が2万人を超すという、本当に書道界においては非常に華々しい時期であったと思いますけれども、それ以降、ずっと日本は少子化となり、書を取り巻く社会

においても、活字文化となったことも加わって、今では、手書き文字、書道文化そのものが、やや片隅に置かれているような気がしております。

しかし、日本書芸院の先生方のおかげで、役員展はもちろん、小学生・中学生書道紙上演(小中展)、高校・大学生書道展(高大展)、シルバード書道展、それから手書き文字部と、様々な部署で先生方が一生懸命力を発揮してくださいます。書道振興に尽力していただいているところです。

加えて、今年80周年の記念事業として、大阪・関西万博で、5月の7日から11日まで、「未来へつなぐ日本の書×空・海・時を超えて」というテーマで、大きなイベントをさせていただきます。おかげさまで2万5000人を超える入場者がありまして、盛会裡に終えることができました。

さらに、「街なか書道体験」など、いろいろなことを、お知恵をいただきながら活動している最中ですが、「未来へつなぐ日本の書」の会場で、VR書道といった最先端の技術なども披露させていただいたように、もっと何か新しい工夫、もっと書道が元気になる工夫はないものかと思っております。その辺のところを今日はぜひ先生方いろいろなお知恵をお借りしたいと思っております。今日はどうぞよろしくお願いたします。

中村 ます、これまでの事業を要約したいと思えます。現在、我々は書家集団としての活動、それから、公益社団法人としての活動、これを両輪として担っているわけですが、書芸院のホ

ームページでも公開されているんですけども、日本書芸院がこれまでやってきた仕事というのは、日本の書道全体の、いわば牽引役を果たしてきたと思えます。

これは自負になるかわかりませんが、例えば、現実的にですね、10年前、70周年記念のときには、「王羲之から空海へ」日中の名筆「漢字とかなの競演」という特別展を開催しました。日本の国宝級の作品、平安朝のものから江戸時代までのもの、そして、台北の故宮博物院の作品、さらに、何創時コレクショントゥ、日本にはほとんど来ることがない名品を大阪市立美術館に集めました。

あのときに、日本書芸院としての大きな仕事の、一つの山があったかなと、私は思っています。書家集団というのは、自分たちのために、書を学ぶためにある集団なんです。ああいうこともできるのは、公益性を重んずるといって、その役割を自覚してのことだと思っております。その前、平成15年には「海を渡った中国の書」という特別展で、アメリカのエリオット・コレクションの所蔵作品を、当時の栗原盧水理事長が中心になって一堂に集めました。関東の大きな団体の先生からも言われたと聞いたんですが、関東の人々の率直な感想として、日本書芸院の機動力と企画力と実行力に感心している。それを時々私も耳にすることがあります。もちろんそれは、辻本史郎先生から始まる日本書芸院歴代の「イズム」を、我々が今は理事長が体現されているわけですが、それを担ってきたということ。

それからも一つ、例えば子

どもさんや中学生、高校生、それからシルバードの方々、この人たちに對する日本書芸院の事業にあたるものも、関東にはあんまりない。我々の自負してよい活動で、今後も大事にしていかなければならないということだと思えます。

また、80年の間に、日本書芸院はさまざまな展覧会を開き、その活動の記録を書物として、図録として残してきました。我々作家たちの作品のみならず、コレクション、エリオット・コレクションもそうです。中国、日本を問わず、国宝級の作品集もそうです。あるいは、会員で物故された先生方の優れた業績の作品集等を日本書芸院としてストックしてらっしゃる。物故作家の過去の作品をもう一度見てみたい、という場合のアーカイブスとしても、我々は本という形で残しています。

これも、公益社団法人としては大きな役割です。今、3つほど申し上げましたけれども、特に、この間は万博への参加を終えました。2万5000人の入場者の方々とともに、日本書芸院がよいことをしたという実感は本当にあります。

そういう活動を今後も我々がしていかなければならないということですが、今ざっと振り返りましたけれども、ここからは、大田先生から順番に、50音順に先生方個人の感想をまとめていただきたいと思えます。

大田 中村先生が先ほど言ってくださった、「海を渡った中国の書」とか、「王羲之から空海へ」など、毎年特別展が催されていまして、僕は20歳代から30歳代で、大きな影響を受ける、吸収する時期に立派な展

80周年「書」もつと元気に

覧会で実物を目の当たりにでき
たというのは本当に幸せで、そ
れが今財産となって、自分の書
の世界の一つの核になっている
んじゃないかなと。

私は、書芸院では「小中展」
に所属しているんですけど、た
くさんの作品が集まってしま
す。みんな一生懸命に書いた作
品を見ると、この子たちが将来
書道やってくれたらいいのにな
というのを、いつも思います。
そして、このうちの1割の人が
書芸院に入会していただけたら
いいなというように、常に思っ
ています。子どもたちが成長し
て高大展に出してくる、そして
また書芸院展に出してくると。
事業で関わっていて、そんなふ
うになればと感じています。

それから、やはり、今年の大
阪・関西万博でのイベントとい
うのは忘れられない。5日間、
本当にクタクタになりましたけ
れども、みんなそうだったと思
うんですけども、でも、もう
チームというか、ああいっしょ
気というのは、しばらくこうい
うことはないだろうなというぐ
らいの最後は感動でしたし、来
ていただいた皆さんの笑顔とい
うか、書というのは面白いんだ
なというのを少しでも感じてい
ただけだと立派な事業だったなと

思います。忘れられない体験で
した。
あとは、自分のお弟子さんと
か、習いに来ている人たちに、
書芸院の、例えばシルバリー展で
出品してもらったり、書芸院展
に出品してもらったりしていま
すけれども、そういう人たちが
書芸院だけじゃなくて、書に触
れるという機会を作ったのが、
書芸院の事業じゃないかなと。
いかに一般の方にも書というの
が面白いなという、楽しそうだ
なと。字がわからなくても、あ
あ、これは好きだなとかいうよ
うな、そういう感覚を呼び覚ま
すような、そういう事業を書芸
院はこれまでしてきましたし、
これから先もそういうのを引き
継いでやっていくべきだなと思
っています。

今後いろいろな事業を通し
て、書にまつわる様々なことを
我々書家集団と一般の人たち、
子どもたちというふうな、そう
いうつながりを持っていけたら
いいなというのが私の今のこ
ろの感想です。

田ノ岡 11年か12年ほど前だっ
たと思いますが、初めて魁星作
家を選んでいただいて、出品さ
せていただいた記憶がすごく色
濃く残っています。

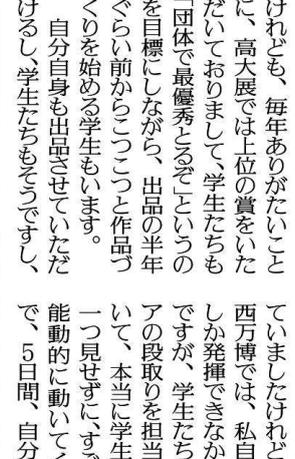
それまでには選ばれた他の先生
方がどんな作品を出品されたの
かというのを、まずは見てみよ
うと思っ、図録を引っ張り出す
してたくさん見せていたけれど
で、ある先生の作品が目にとま
りました。その作品は憧れの存
在として光ってきまして、その
先生の作品を少し参考させて
いただきながら、二八(二尺×
八尺)の三幅の、俳句の作品を
書かせていただきました。あれ
だけ大きな作品を揮毫して、そ

れを表現させていただけるとい
う大変貴重な場で、自分がその
大役を務めさせていただけるの
かなという不安も持ちながらで
すけれども、でも、できるだけ
のことをやってみようと思っ
て、思い切って表現をさせてい
ただきました。当日、展覧会の
会場でギャラリートークでお話
しさせていただいて、つたない
言葉だったんですけども、発表
させていただいたことを今でも
覚えています。



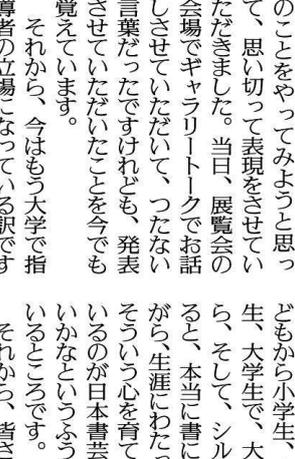
副理事長
中村 伸夫 氏

それから、今もう大学で指
導者の立場になっている訳です
けれども、毎年ありがたいこと
に、高大展では上位の賞をいた
だいておりまして、学生たちも
「団体で最優秀とるぞ」というの
を目標にしながら、出品の半年
ぐらいい前からこのことと作品づ
くりを始める学生もいます。
自分自身も出品させていただ
けるし、学生たちもそうだし、
それから、皆さんおっしゃっ
ていましたけれども、大阪・関
西万博では、私自身は多少の力
しか発揮できなかったと思うの
ですが、学生たちのボランティア
の段取りを担当させていただい
て、本当に学生たちが嫌な顔
一つ見せずに、すごく前向きに、
能動的に動いてくれたおかげ
で、5日間、自分自身もたくさ
ん笑顔をもらいましたし、勇気
づけられました。
中室 私も先ほどの大田先生と
同じく小中学生展をお手伝いさ
せていただいているんですけども、
お話があったように、1
万点以上の作品が集まってき
て、それだけの作品を見せてい
ただいています。1万点とい
うのは、今時は珍しいんじゃない
かと思うくらいたくさんの方
で、それくらい送られてくる
いうところに、まだまだ可能性
を秘めているのではないかなと
いうふうに思っています。



理事長
土橋 靖子 氏

書芸院の場合は、小中学生展
があって、それから高大展があ
って、そして一般の展覧会があ
って、シルバリー展というように
非常に息長く支えてくださる発
表の場がある。先ほどもありま
したように、愛好家の人を育て
るという意味では、実際に書を
書かななくても、書が好きとい
う人を育てるという意味では、
すごく大きい意味があるんじや
ないかなというふうに思ってお
ります。ぜひともそういうもの
をずっと続けていけるといいな
と思っています。
それから、魁星展ですね。私
も十数年前に魁星展に出品させ
ていただきました。計3回ほど
出させていただいているんです
けれども、まだ魁星に出してい
ないことに、魁星展の先生方を
ずっと見ていて、やっぱりここ
に出したいという、憧れの場
があったと思うんですね。私も
の憧れの場選ばれたときに
は、本当に気持ちが高まるよう
な思いがありました。当時、幅



副理事長
中村 伸夫 氏

それと、書芸院の中で評議員
になって、役員として仕事をさ
せていただくようになったとき
の、漢字とか、仮名とか関係な
く、部門を超えてとか、会派を
超えて、先生方と接することが
できる機会が多くなり、いろん
な横のつながりができ、いろん
なお話をする事ができるよう
になったのも非常にありがたい
機会だったのだと、書芸院のシ
ステムのあり方というのが本当
にありがたいなというのを実感
しながら務めさせていただいて
いるような状態です。
菅井 先生方の話を聞かせてい
ただく、中、より一層、日本書芸
院に育てていただいたんだと実
感している次第です。
中村先生から公益性と書家集
団という話が最初にありまし



副理事長
中村 伸夫 氏

た。私は大学に入学して書道を
始め、のめり込むことになりま
す。それから三十数年を振り
返った時、日本書芸院のさまざ
まな取り組みに対して、意識せ
ずく自然に接していたことに
はたと気がつかれました。作品
を書くことが単純に楽しくて筆
を握ってきました。
高大展ですが、第一回から出
品をさせていただきました。学
生を終えた後は指導者として生
徒の作品を出品してきました。
高大展も今年で30年の節目を迎
えました。何らかの立場で参
加し続けてきたということにな
ります。
日本書芸院ではさまざまな特
別展を開催されており、一観覧
者として楽しく拝見してしまし
た。「中国書画名品展」は書道
を始めて間なしの頃の展覧会で
あったと思います。大阪市立美
術館にさまざまな作品が展示さ
れていた中、ひときり目立つ作
品に傅山の条幅があったことを
覚えています。書籍で見た作品
とは全く異なり、本物の持つ気
韻と迫力に驚きました。目にす
るサイズが異なることと受ける印
象がこれほどまでに違うのだ
というのを知り、はじめて
書の作品に圧倒されたのがそ
の作品でした。同時に「書とい
うものはこういうものなんだ」
と教えられた展覧会でもあり
ました。



理事長
土橋 靖子 氏

私も魁星展という大きなステ
ージで作品を発表させていただきました
機を頂戴しました。その時
のコメントでも触れましたが、
実際に傅山の条幅を親た経験が
大変大きな財産と刺激になった
ことは間違いありません。
わけも分らずただ楽しいだ
けで書道にのめり込みました。

自分の成長を振り返ると、このような経験の機会を継続させ、また新たな企画を形作ることは、日本書芸院として今後も重要な活動であると思います。一人でも多くの人が書道の魅力に触れ、知っていただけたなら、書の世界はより一層明るい展望が待っていると思います。中村先生がおっしゃいましたように、「王羲之から空海へ」は書家ではない方が2度3度と足を運ばれていたことで、貴重な啓発の機会となったように思います。なかなかできることではありませんが、万博も同様であったと思います。海外の方が楽しんでそこに、また熱心に作品を見ている姿やワークショップでの様子を見てみると、私も元気をもらいました。このような活動を今後も続けることができたら、書を続けていきたい、新たにやってみたいと思う入り口になれるのではと感じています。

松村 私は今、高大展の仕事をさせていたいただいておりま。学校勤務の立場ではないので、有望な若い人たちの書に対する情熱に触れるにつけ、心を打たれること頻ります。実は、うちの会では高大展への出品数が、以前は極めて少なく、一桁しかなかったんです。自らここに奮起を呼びかければと危機感を抱いていたときに、折々この業務にかかわる機会をいただき、「将来のために！」と促し始めた。途端に出品数が一桁増え、さらに次の年にはまた倍増して……というように、一気に指導することに目覚めてくれたんです。

出会うことができ、「これはかけがえのないことだ」という、大きな覚醒を与えていただいたのです。これは『書芸院マジック』なんです。ただ享受するだけでなく、我々がしっかり引き継いでいかねばなりません。

中村 私は振り返ってみると、30歳代のごころ、今の教養講座が、「夏期講座」として開催されてきました。書芸院の先生方が内部講師として登壇され、平素の制作に対するお話などを生で拝聴することができました。先駆者の惜しげもない貴重なお話に感銘を受け、毎年エネルギーとさせていたことを思い出します。私の師匠が教養部長を引退した直後の夏期講座は、外部講師が日本画の中路融人先生。そして、師岡田契雪と土橋靖子先生が講師をされたんです。



常務理事 大田 鵬雨 氏



常務理事 中室 舟水 氏

そうしているうちに魁星展が始まるわけなんです。魁星展はあのころ、錚々たる先輩方が出しておられました。その当時は多分、各会派から推薦指名された人選だったと思います。あの頃、人ごとのように、すいいなと憧れていたんですが、杭迫柏樹先生が理事長のとき「今の世代分布だと、君たちは絶対日の目を見ることはないから（魁星展をオーディション制にする。だからこういいうところでさっさと努力して、合法的に先輩方を追い越していくぐらいの努力をしないとだめだ」というお言葉をいただいたんです。チャンスを与えていただけで本当にうれしかったので、それを真に受けて、頑張りましたから。

この魁星展が累々と続き、次々と若い作家が誕生しては、彼らが会派を超えて交流できるのも貴重で、書芸院の底力に感謝しいから、肉筆のものを学んだ方がいい。だから王鐸でやるんだ」と。仮名の土橋先生が、なんと、王鐸から来たんだ！などと、大いに興味をひかれることがたくさんあって。劉蒼居先生が、不眠不休で頑張り続けたという、超人的な苦学話とか、江口大象先生が王鐸について楽しく話されたこととか、思い出になってくるのがいっぱいあって、これらはもう本当に書芸院ならではのだったと思います。

「書道ってこういうものなんだ」と言っておられたのを聞いて思い出したんです。そのときに担任の先生が「子どもにこんなんで、どんなや」と突っ込んだんですが、私は、「いや、わかる。君が言っている書道ってこんなや」と、書を通して子どもと理解し合えたことがたまらなくうれしかったんです。こういう機会を書芸院からいただいて、それを地方や各会派へとノウハウを広めていただけたらなと思います。

中村 次のテーマは「これから日本書芸院が果たすべき役割」ということです。土橋先生と5人の先生方の話を聞いていますと、結構、書芸院はいいことをやってきた、実績を残してきた、特別展にしても講演会にしても、万博にしても、これは、これから、我々はどうすればいいのか公益社団法人ですから予算の執行にはいろんな制限がありますし、今までのように、いわば大きな花火を、ドカンと打ち上げてきて成功してきたわけですけれども、これからそんなな大きくなくても、自身があって、効果があって、本当に認められる書芸院になるような花火を上げていかなきゃならないと思うんですね。

今までの話の中には出てこなかったんですが、特別講演会や教養講座という事業もありま。今度も、土橋先生のお世話で4月に藤山直美さんが来られますし、2月には教養講座のシンポジウムとかもあります。これまで日本書芸院がお願いした講師というところ、ものすごく第一級の人ばっかりなんです。これはやはり続けたいなと思うんですが、こういった特別講演会や教養講座で、我々が今後目指すべき方向性というところについて、まずは、先生方に自由に話していただきたいと思います。

日本書芸院は書家集団ですが、各界各層で活躍されている著名人にお願するようなのは、予算が付き限り、やるべきだと思うんですね。一般の方々のためにも有意義だと思います。また、書という芸術が、ほかの芸術、例えば文学や、あるいは舞台芸術、そういうところと一つの土台の上に立っているのが、現代の一つの文化芸術ですので、これはやっていかなければならない。

こういった講演会や教養講座に関して、先生方、何か提言がありますか？ もっとこうしたい、とか。

大田 一般の方を無料で招待してそのお話を聞くと、我々も知らないこともたくさんありますし、本気で喜ばれる企画です。教養講座の方は、専門的な書に関するお話を聞きますけれども、ここ何年か日本書道史の話だったり、中国書道史の話だったり、中国書道史の話だったり、これだけ書をやっていたら知らなかった、というところもあります。そういうことをああいう場でまた知らせていただけるのは、我々の教養も大きく広がると思うので、あの事業というのにはもう当たり前にあるとやっていたらだと思っんですけれどね。

中村 例年、理事長が苦労され人選されていますが、なかなかお忙しくて来られない方がおられます。土橋先生、何か苦

会派超えた学びの場に

が、ある会派に入っていて、その会派がまた、日本書芸院に入っている。日本書芸院はまたある意味でもっと大きな日展とか、そういうものにも関係している。輪が幾つもあります。小さな輪、大きな輪といっぱいあって、それが重なっているわけですね。

ただ、やっぱり基本的にはたった二人の個人が成長するということか、個人が成長する事ができるよ！にするために、そういう集団はあるべきか、というふうに僕は勝手に思っているんです。さつき松村先生から話がありましたけれども、自分の考え方とまったく違う書家もおられることで、やっぱり学ぶことって結構あるんですよ。会派横断的な横のつながりも、我々一人一人の書家としては、もっとあってほしいなという気持ちがあります。

そういう点について、先生方、他の会の人たちとの交流ということがあるようで、実はあまりないようにも思われるのですが、展覧会や企画の時に集まるだけ。

大田 実務機構で、それぞれ分かれて仕事をさせていた方がいいのが、結構、派閥横断というか、会派横断になりますから、我々小中展は、かなりきつ々やっています。本当に楽しんで、仕事は早く、後を楽しみにって言って、夜ね、集まって結構な人数、みんなでワイワイ食事もしながら、それこそ書道の話もするし、自分の会とか、書道に対する悩みも話しますし、それは本当に素晴らしいことだなというふうにも思っています。

中村 調査研究部に最初入った時、調査研究の仕事が終わった

後、あなたとよと食事して、あなたとよと先生の筆の持ち方とか、あなたの先生の使っている紙とか、じっくり話をしたんですよ。そして翌週になら、その話した人が「僕たちの会を使って筆は、これが一番です」と送って来てくれた。自分が使ってた筆も送って、交流したんですが、あいうことがあった方が楽しいかなと思いますね。

中室 大田先生が言われたとおり、小中展では、仕事はしっかり、終われば休んで。そんな中で人とつながり、仕事にいい影響が生まれます。

あとは、普段別のところでお会いした時に、気軽に聞けないことを聞いたりとか。そういうつながりが本音に近い。

中村 大学の先生もよく言われるんですけども、一方的に授業で話すよりも、終わった後の飲み会での話ですね。そういうところで学問の話をするという場面が今はなくなりつつあると。それが学問の底辺を弱めているんだと。

大田 世の中全体がそんな形ですね。

中村 そういう場で、先生と学生が自由に話し合っていて、先生は先生に対して自由に質問できる。少なくとも、そういう機会があることで、世の中の学問の基礎というのができていくんじゃないかと思うんです。

菅井 変化をもたらすためには一つの所にはないものは難しく、なかなか新しいものは生み出せないですね。作品制作には創造力が重要で、さまざまなものを表現していくものにとって限られた場所で制作を続けたら、新たな可能性に気づきにく

くその思考も広がりにくいと思います。新たな可能性に気づいたとしても、そのための一歩を踏み出す勇氣もかなりのエネルギーを要するものです。「この紙を使ってみたら」みたいな会話から道具を変えることができたら、気楽に新たな可能性に気づけ、作品は大きく変化すると思います。



常務理事 松村 博峰 氏



理事 菅井 淳 氏

きいことだということに思っています。

中村 ところで、最初、土橋先生がおっしゃったり、僕が説明したりした、大きな企画、お金をかけてどこかの美術館から、国宝級の名品をお借りして展示するという時代はもうなくなってくると思います。

これからの日本書芸院は、費用に対してどういう効果があるかということがある程度見込める「小さな火花」をいくつも上げていくしかないのかなと思っています。

例えばパフォーマンス。「本格の書のパフォーマンス」ということで、大学生を中心にやっていくことも一つの目玉だと思います。

それ以外に、もうかなり前に、書芸院はすごいいい展覧会「書のすべて展」というのをやっています。書というのの何かというテーマであらゆる書の現象を、大阪・天満橋松坂屋でやっています。

それほどお金はからないけれども、書というものの原点を探るための、漢字、仮名、篆刻、さまざまなものの原点回帰のための企画展を新しい発想でやってみるというの。その時に、ただ展示するだけじゃなくて、今のいろいろな機械を使って、拡大したり、ポタン一つで角度が変えられるとかですね。要するに新しい技術を使った展覧会でお金のかからないものを今後5年、10年のスパンで考えていく。そういうことも大事なかなと思っています。

そういう今後の企画について

何か、こうしたもののほかに、こういうことをやったらどうか、という話がありましたら、中室 今、高校生、大学生のパフォーマンス。このパフォーマンスを学生でやるのではなくて、例えば社会人、企業の中に書道部みたいなものがあって、その中で社会人の書道パフォーマンスというのができてきたり、あるいは書道パフォーマンスのプロ集団みたいなものが、その中から出てきたりしたら、それはそれでおもしろいんじゃないかなと思います。作品を掛ける展覧会の中に、一般の書道のパフォーマンスも組み入れるということも、面白いんじゃないかなと。

中村 以前、話し合いをした時に、大学生に限らず、要するに、書の愛好家たちのパフォーマンスのグループもどんどん、もしあれば、それがまた底辺の広がりにつながるんじゃないか、という話がありましたね。

大田 田ノ岡先生、いま大学生のパフォーマンス準備中というの、学生にもあるでしょう、これに向けての。

田ノ岡 そうですね、うちの大学では、今、書道パフォーマンスもそうだし、VR機器をつけて大画面にデジタルのソフトを使った、筆文字っぽいものを書いて見せるという「VR書道」というのを積極的にやっているんですけど、本当に様々なイベントに学生たちを呼んでいただいています。学生たちがユニット組んでるんですよ。今、学科の中で四つぐらいユニットがあるんですけどね。その中でも、技術の高い子たちが集まっているグループだった、割とその子たち目当てで、グループ指定で依頼が来るんですよ。その子

たちは、自分で独自の名刺をつくって、いろんな人に配ったんですよ。「仕事あったらよろしくお願ひします」って。

土橋 やりますね。

田ノ岡 そうしたら、そのうちの一つの企業さんが「今度、会社創立の100周年記念を東京で開催するので、その時にぜひ、パフォーマンスをやってほしい」と言ってくれました。それで、帝国ホテルで、来年の5月に出演させていたということになったんです。

大田 この間の高大展授賞式後に大学生が披露した書道パフォーマンス、あれ非常によかったですね。少人数だったけど、今のこの新しいパフォーマンスに、より近い何かイメージのものをやったり。本当にあいう感じが多分、方向性だと僕は思ったので、とてもよかったです。

松村 踊りや音楽だけでなく、「書く」ことの本筋を前面に押し出す方向性が見えましたね。本来なら、我々が学生さんを売り込んであげないといけないのに、学生さん自身が既にプロモーション活動ができていて、これは素晴らしい。

大田 需要はあるわけですよ。書に企業とかの関心も向いているというところから、こういうことを機を逃さないように我々もしたいなとだんだん思います。

田ノ岡 それで、学生たちも依頼先から謝礼をもらって、それがたまっているって、それでまた新しい道具を買えるとかですね。それがまあ、もしかししたら、職業になるかもしれないという希望も持っているわけなんです。



大田 やっぱり、どちらかといえば踊りに集中している感がある高校生のパフォーマンスとは少し違っているという方向性が、多分、大人受けするんじゃないのかなと思うんですね。あまり騒がしいものではなく、きちっと落ち着いたものができていると、そういうふうな、いい企業とかもスポンサーなんかになつてくれるだろうから、そこは結構大事だと思うんですね。

中村 とここで、世の中に1000人いて、僕らが今話していることというのは、100人のうちの何人ぐらいに通ずる話なのか。つまり、まだまだ書道というのは社会で正しく認知されていないように思われるのです。そういう認識も踏まえて、我々は今もう一回、原点に戻って、日本書芸院の活動の中での社会的普及、それもまだまだ必要だといふふうに思うんですね。

大田 生活の中に、書いていくのがなくなつたからです。明治時代までは、文字を書くために毎日筆を使っていたのが、今は、そういう生活がなくなっているの、そうなる、隔離されてきますよね。

松村 そういう原点的普及活動として「手書き文字はんざい」では、参加者が一体となつて1日盛り上げています。ところが



が、そこに書きに来ている子どもたちについてのは、教室で習っている人がほとんどで、何のレクチャーもなく、筆を持つては書けるんですね。そんな中で、まったく何も経験のない子どもたちを集めて、どれだけ啓発できるかという点にも重きを置きたいですね。

根本的に筆の持ち方から始まって、「清書」という独特の空気感の中、みんな心を一つにして今から書きましようという、そういう緊張感も合わせて場を与えてあげられるような、そんなワークショップとかできたらいいかなと思います。

また、会場では、馬場尚千さんとフリーアナウンサーに毎回、司会でお世話になってい

るんですが、書道のことをすごく学んでくださっていて、子どもたちや参加者にやさしく言葉をかけていただいています。ここに、できればもう一人講師がいて、折に触れて参加者全体に書き手の立場からも声をかけてあげるとみんなに響いていくんじゃないかと思うんですね。

先日の「手書き文字はんざい」で、最後の「学生代表者揮毫」に出た子どもたちに「何が難しかった?」って聞くと「はらいが難しかった」と。それに



評議員
田ノ岡 大雄 氏

対して「そうね、この課題はほらいがいっぱいあるからね」と心寄り添う温かい言葉が投げかけられたんですが、そこで終わるんじゃない、もう一人専門の講師が共に対処していたら、「やっぱり大きい筆で書く」と、普段の半紙の稽古とは違って紙離れが悪くて難しいね」と、もう一歩踏み込んで言葉をかけてあげられたら、みんな同時に「ああ、やはりそうか」と腑に落ちることになって、共感が深まるように思います。

中室 たくさんの人に知ってもらうためにも、やっぱり今は絶対、SNSが不可欠だと思うんですね。日展なんかも積極的にSNSを使っていますから、書芸院もそういう部門を一つ設けて、発信をもっとたくさんしたいと、一般の人の目には触れない。全然興味ない事柄でも、インスタグラムとかに出ると見る、という人が多いみたいなので、だったら若い世代の会員たちに、若者目線でSNSを発信してもらいたい。そういうところがあってもいいのかな。

土橋 どういうふうにしたらいいか、ちょっとイメージありますかね。

大田 例えば展覧会部に、書芸院の役員展部で誰かそれを充てて、それで、写真撮ってもらって、会場の様子とか、こういう作品出ますよっていうのを各

部一人ずつくらい置いておいて出してもらおうか。

土橋 あと総務部とかにそういう役があってもいいかもですね。

松村 新たに、第2広報部みたいなものがあつたらいいんじゃないかと思えますね。

土橋 それはぜひ考えましよう。また具体的にご意見を聞かせてください。

松村 できれば80周年に向けて、万博の場でも思ったのは、日本の書道を世界に発信するために「ギネスに挑戦」みたいなものもやってほしいな、と。中国でも「書法でギネスに挑戦」というものが既に始まっているんですよ。何千人も集めて、儒教の「儒」という字を一齐に書いたり、野外で何十メートルの巻物に、親孝行の「孝」という字をみんなでリレーのように書き続けたりとか。

そういうことを、映像ですつと残し続けながらギネスに挑戦して、そういうものを書芸院がインスタグラムを通じて発信するとかしたら、世の中の反応もあるんじゃないですかね。

土橋 書のすべて展でやるのかね。

松村 ぜひやっていただきたいなと思えますね。

大田 こういうことはですね、今度は世代をつながないといけないですから、僕らはまたちよ

つと年齢若いんですけれど、次の世代につなげないといけないし、またその先にもつなげないといけない。でないと、どう든書芸院が小さくなっていきま

す。

土橋 そういう発信の仕事はね、別に(書芸院がある)大阪の近隣にいる方じゃなくてもいいと思うんですね。お得意の方、ぜひそこは考えていただければ。

大田 テレビのニュースを見ていたら、AI(人工知能)ってすごいじゃないですか。書道もいざれ、そういうものにとつて代わられるかもしれないと思

つたんですね。その中で、いい話だったなと思ったのは、歌手の松任谷由実(ユミミン)さんの新しい曲を出したんですが、曲を聞いてみると、何かちょっと自分の声と昔の自分の声をミックスさせて、AIで声だけ合成して初めて出したということなんです。ただ、作曲にはAI使いません。なぜかと言ったら「作曲が一番楽しいの、なぜそんな楽しいことを機械にさせるの?」ということなんです。

我々は多分そうなんです。一番楽しいって、作品を創ることだから、こぼやったり死守しないといけない。多分、僕もよくわからないですけど、AIはど



と、そういう「変態」の作品が、果たしてできるのかどうかというのはいわからないけど、でもそういうところが一番、本当に作るところが楽しい。苦しいけど楽しいから、ここを絶対渡さな

いように、あとの世代にもちゃんと「やっぱり書く」って伝えていこうことを伝えたい。

中室 この間、ユミミンの対談があつた時「作詞はやっぱりAIには無理」と言っていたんですね。やっぱり行間とか、言葉の間がAIにはない。だから作詞は無理だろうなというのを、彼女は言っていました。

我々で言えば、作品を書く時に一定の条件があったらAIはできるだろうけど、紙も墨も筆もすべて使うものによつて変わ

る。それは人間の手でしかできないから、作品制作の部分は絶対大丈夫だと思えますね。

大田 そこは我々の英知として、ちゃんと残しておかなければいけない。

松村 AIは、いろんな情報を集めて、全部画(化)することしかできません。やっぱり書は、書家が「斉」に同じ古典を臨書したとしても、絶対に違うものしか出来てきません。それが、その書の尊さなので、そりゃAIなんかには譲れないですね。

中村 今日は意義ある話がありがとうございました。これまでのこと、今後のこと、それを総括して、土橋先生にお願いしたいと思えます。

土橋 本当にありがとうございました。今日はとても有意義で、また楽しいお話を聞かせていただきました。「勇気」、「横のつながり」、「書のすべて展」、「第2広報部」など、キーワードをたくさんいただきました。これを一つでも具現化させていきたいものだなと思えました。いざれにしても、守るべきは守る。伝統です。譲れないもの、こんな楽しいものは機械にやらせてはいけないという、譲れないもの、守らなきゃいけないものがある。だけれども、やはり現代の風を感じ取りながら、新しいものを取り込んでいくという。この二つ、まさにこれは、日本書芸院の掲げる「伝統と創意」ですよ。いいネーミングとあらためて思います。これは、躊躇せず、前向きに進めていきたいと思っております。具体的には、まずは、全国大学書道パフォーマンス。本格の書のステージ、これをこれから新しい企画の一つとして取り組んでいきます。

それから、対話型鑑賞会について。これは30年くらい前から世の中に広がってきて、書芸院でも一昨年より取り組んで参りましたが、専門の方、NPO法人芸術資源開発機構という、対話型鑑賞会のプロの方に初めから、鑑賞会についてのお話を伺って、そして皆さんと共有して広がってほしいなと思っております。

今日は本当に貴重なご意見、ありがとうございました。

書の演技 表現多彩に

軽快な音楽に乗せて体を動かし、巨大な紙に太筆で力強く揮毫する「書道パフォーマンス」。書に音楽とダンスを融合させたその演技は、高校生を中心に若い世代の支持を集めています。現在、各地で高校生を対象にした大きな大会が開かれる一方、文化祭やクラブの発表会といった学内行事にとどまらず、地域のイベントなどに参加して演技を披露するなど、活動の場も増えつつあります。

大学生「楽しさ伝えたい」 大阪・関西万博で披露

たちによる書道パフォーマンスに注目が集まっています。日本書芸院が開いた、大阪・関西万博でのイベント「未来へつなぐ日本の書」や、全日本高校・大学生書道展(高大展)の授賞式では、四国大学(徳島市)と帝京大学(東京都板橋区)の学生グループが演技を披露、多くの観客の喝采を浴びました。

広がりをもてる書道パフォーマンス。四国大学で活動する学生たちに話を聞き、新しい書表現のひとつとしての可能性を探りました。



大阪・関西万博のイベント施設、「EXPOメッセ WAST SE」。令和7年5月10日、「未来へつなぐ日本の書」が開かれているこの場所に、藍色の着物

にはかまを着た大学生15人が姿を見せました。この日のために、四国大学文学部書道文化学科の学生から選ばれたチーム「書藍」です。

まず、メンバー3人が登場。NEWSの「生きろ」が流れる中、月明かりに鈍く照らされた夜空のような藍色の同心円が描かれた。パネルへ「煌星」煌めく星のように人生よ輝け」と白の顔料で揮毫。続いて4人が、横に長く広げた紙に、山桜の花やあじさい、赤とんぼとススキ、赤く咲いた冬ボタンなどをカラフルに描いたり、調和体で「海手より」日は照りつけて「山桜」「あじさいの花の上でく はやてかな」といった、日本の四季を詠んだ句を書いたりして、日本伝統の「作び」「寂

最後は、地球と巨大な花を描いた大きな紙を床に敷き、嵐の「サクラ咲ケ」を流しながら「創造」「脈々と受け継がれる和の魅力を次世代へ 命輝く未来のために」など力強く記しました。書藍は、この日、午前と午後、計2回ステージに登場。大



高大展授賞式で帝京大書道部が披露したパフォーマンス

勢の観客に演技を披露しました。11日には、帝京大学書道部の15人が登場。和太鼓の音に乗せて、4枚のパネルに「萬邦和親」と書いたり、巨大な用紙に「清けき春の風のにりて桜散る」などと揮毫したりして、来場者の盛んな拍手を受けていました。

西大書は、8月22日に大阪国際交流センター(大阪市天王寺区)で行われた高大展授賞式にも参加。四国大学が3人、帝京大学は6人が式典後のステージにあがりました。四国大学は、淳仁天皇の兄、船王が四国山地の山々を詠んだとされる和歌など2作品を、帝京大学は有名ロックバンドのヒット曲の歌詞の一節など2作品を揮毫しました。

「書藍」のリーダーを務めたのは、書道文化学科4年生の大上希さん。万博でのパフォーマンスについて「書道にあまり関心はないけれど、ちよつとぞいてみた、という方もいらっしやうと思うので、書道ってかっこいいな、と興味を持ってもらえるきっかけになったのでは」と振り返りました。サブリーダーの同学科3年生、小林美紅さんは「全員の個性や、それぞれの良さを合わせた作品に仕上がって、良いパフォーマンスだったと思います。書道パフォーマンスってこんなに楽しいものなんだ、と伝えられたかな」と話します。また、メンバーの同学科2年生、逢坂羽瑠菜さん

は「初めて県外でパフォーマンスを披露して、普段とまったく違う環境、しかもたくさん人の前というところで、すごく緊張しました」と笑顔を見せました。四国大学には、学生が自主的に取り組む教育研究、課外活動などを支援する「学生プロジェクト支援事業(GP)」があり、3人とも、この制度を使って活動資金を獲得し、書道パフォーマンスグループを結成、活動を続けてきました。

同大学で活動するグループは、現在4つ。学校祭など学内のイベントへの出演だけでなく、依頼を受けて地域のイベントなどに出かけたり、小学校や老人施設で演技を披露したりしています。最近では、3Dデジタルをつけ、大型スクリーンに映し出した仮想空間に筆文字を書く「VR書道」や、紫外線を使った演技といった、新たなパフォーマンスにも挑戦しているといわれています。

3人はいずれも、高校時代からパフォーマンスに取り組んでいます。大上さんは「紙の大きさや作品の見せ方も違いますが、高校で

「全国大学書道パフォーマンス大会」創設

日本書芸院は今夏、「全国大学書道パフォーマンス大会」を創設します。新しい書の表現方法のひとつとして近年、注目を集めている書道パフォーマンスを、古典をベースにし、書法に重きを置くことによって、本格的な書のステージ、に昇華させ、王道の書が新たな社会との接点を持ち、次世代へ継承、発展させることが狙いです。

読売新聞社との共催。4月1日から5月11日までに、参加申込書と揮毫作品の写真、パフォーマンスの動画データなどの資料を添えて申し込み、写真・動画で予選審査を行い、7月に本選を行います。審査では、用筆の練度や書の古典的理解と現代的再表現といった「技術の習得度」を重視。また、揮毫の際には、本格

の書に相応しい身体表現に努めるよう求められます。

最優秀賞には賞金10万円、技能賞、敢闘賞にそれぞれ賞金3万円が贈られます。また、本選参加者には、審査員特別賞および活動資金3万円を授与します。

参加資格は、国内外の大学(専門学校、短期大学、大学院含む)などで、開催年度の4月1日時点で25歳以下の人。1チームの揮毫者は、3人以上10人以内。参加費は無料です。なお、日本書芸院ホームページ(https://www.nihonshogeiin.or.jp/) 所載の大会要項や開催規則を熟読・ご理解のうえお申し込みください。

問い合わせは、日本書芸院内の大会事務局(電話06・6945・4501、Eメールinfo@nihonshogeiin.or.jp)へ。

は、高校生らしい元気さを表現していました。大学生になつてからは、書道を専門に学んでいる学生のパフォーマンスです。で、字形や作品の構成といった、クリエイティブを重視しています」と、意識の変化を話します。小林さんは「高校時代は、書き方や動きなどに先生の指示があり、それに従っていました。が、今はすべて自分たちでアイデアを出し、仲間と相談して作り上げています。観客に好感を持ってもらえる、自分らしい演技ができるよう、日々考えています」といい、逢坂さんは「パフォーマンスするだけで精いっぱいだった高校生とは違い、見られる方にとどう楽しんでいたかかを意識しています」と話

同学科講師の田ノ岡大雄さんは「大学は、学生が自ら選んでやって来た場なので、教員は求められればアドバイスしますが、学生自身が培ってきたものを持ち寄って融合し、考えながら作品を生み出していくのが基本。その中で、新たな表現方法を身につけるとともに自己アピール力や、自分をプロデュースする力を育み、書道によって自分が成長した姿を発信できるようにしなければいけない」とし、「最初から完成形にできるものではないので、何度も実践を重ねていってそういう力を養って、自分の書を作り上げたりしてほしい」とエールを送っています。



書道パフォーマンスのやりがい話を(右から)大上さん、小林さん、逢坂さん

視野広がる「対話型鑑賞」

絵画や書自由に想像して

鑑賞をはじめとするアートの鑑賞法として、近年、注目を集めている「対話型鑑賞」。学校教育の現場や企業の社員教育などにも取り入れられています。しかし、「書」の鑑賞法としては、どう取り組めばよいのか。ファシリテ

土橋 本日はお忙しいところありがとうございます。私たちが日本書芸院は、公益社団法人として、各世代の展覧会や手書き文字のワークショップなどを通じて、書道の振興・活性化につとめております。しかし、時代の変化や少子化といった中で、書くだけでなく、見る、鑑賞するといったことにも力を入れていかなければならないのではないかと。ファン、というと語弊がありますが、鑑賞者として興味を持っていただける方を増やしていくこと。そのような考えで、鑑賞、とりわけ、対話型鑑賞について学びたく思い、お越しいただきました。本日はよろしくお願いたします。



芸術資源開発機構(ARDA) 代表理事

三ツ木 紀英 氏



日本書芸院 理事長

土橋 靖子 氏

ーター(進行役)養成などを通じて対話型鑑賞の普及に力を注いでいるNPO法人芸術資源開発機構(ARDA)の、三ツ木紀英代表理事に日本書芸院の土橋靖子理事長がインタビューし、その可能性などを聞きました。

展覧会や、文化資源と市民の出会いを生み出すプログラムの企画といった活動を行っています。最近では、対話型鑑賞を主体的にやっていく人を育成して、その人たちが児童養護施設や高齢者施設、地域の施設で活動できるように橋渡しをし、活動の場を広げていくコーディネート機能を作り上げようとしています。

対話型鑑賞は、もともと、アメリカ・ニューヨーク近代美術館(MOMA)で開発されたもので、アメリカでは「Visual Thinking Strategies」(VTS)と呼ばれています。日本では、11年からARDAの事業としてスタートしました。当時、MOMAの元教育部長でVTS創設者のフィリップ・ヤノウィンは京都に来日し、1年かけてトレーナーを養成するセミナーが企画されたのですが、直前に東日本大震災が発生しました。外国人の方が次々

と日本を離れる中、ヤノウィンは「今の日本にこそVTSが必要だ」と、単身で来日され、セミナーが実現したんですね。土橋 今の日本に必要、というのは、どういったことですか？ 三ツ木 対話型鑑賞は、アートという答えのないものに向き合っていて、何を感じたか、どう考えたかを言葉にして、聴き合い、語り合います。自分と違う意見を耳にするのは、だいたい不愉快なんです。対話型鑑賞では、それが「不愉快」ではなく「面白い」。いろいろな話を聞いて「どうしてそんなふうに思ったんだろう」と考えたり、「そういう視点はなかったな」と気づいて自分の中に取り入れたいといったことをしていくうちに、それぞれの意見を尊重する場ができてくるんですね。そうして、考える力やコミュニケーションをとる力が磨かれていく。

大きな災害の時には、情報が錯綜する中、いろいろな判断をし、意見を互いに聞きあつて状況を理解し合うことが必要になると思うんです。そういった対話力や思考力が生きてくる。日頃からアートを通して地域のコミュニケーションを育むことで、問題に直面したときに、互いに協力し合ったり、命を守ったりする力になっていくだろうと考えています。

土橋 私は「アートの見方はもっといろいろあるんだよ」という感じに捉えていたんですが、背景には大きなものがあったんですね。セミナーが予定されていたところに、たまたま震災があったわけですが、それで、目的意識がはっきりした、ということはあるんでしょうか。

三ツ木 そうですね、震災があったことで、より、対話や思考力の重要性が社会に求められるようになったのではないかな、と思います。

土橋 対話型鑑賞のファシリテーター、進行役ですね、その養成講座をARDAで行っておられますが、どのくらいの時間を要するのでしょうか。もちろん、経験を深めていくということが大切だとは思いますが。

三ツ木 私たちの講座では、基本的なことを知るベーシックコースで3日間。朝10時から夕方6時まで対面で行います。それ以外に、オンラインで受ける授業が5時間ぐらいあります。そして講座後には、学んだことが身につくように「勉強会」をすることを推奨しています。とお話すると、とても難しい感じがしてしまふかもしれませんね。しかし、VTS、対話型鑑賞は美術の専門家でなくても、誰でも始められるというところが素晴らしいのです。ファシリテーションの理論、つまり「三つの質問」と応答の方法を学べば、見よう見まねで始められる。経験しながら、少しずつブラッシュアップすればいいと思います。

土橋 その「三つの質問」というのは？

三ツ木 まず、「何が起っていますか？」という質問から鑑賞が始まります。セリフのように二辺倒ではなく、ファシリテーターは作品に合わせて言葉を少し変えたり、補足の質問をする必要があるのですが、これが一つ目です。

たとえば、ある絵画を鑑賞し

みづきのりえ アートエデュケーター、アートプランナー、NPO法人芸術資源開発機構(ARDA)代表理事。
英国留学後、フリーランスやNPOの立場で、美術施設だけでなく街や施設の中で展覧会企画・ワークショップのコーディネートを行う。ニューヨーク近代美術館の元教育部長、フィリップ・ヤノウィンの元「1年ごわたり」Visual Thinking Strategiesを学ぶ。
近年は美術鑑賞のファシリテーターを育成し、ファシリテーターたちのコミュニケーションを広げることで、アートを介したコミュニケーションの機会を創出している。2021年、アート・コミュニケーションのワークショップ研究で、東京大学大学院学際情報学府修士号取得。

感じたことと言葉で伝える

うなと思うんですけど、あそこまで「書」に関して言語化できるのだと、私も大変興味深く拝見しました。

土橋 あのかさんは、思いのほか高度なお答えやご意見をいただきました。ただ、対象の留学生を、美術や日本のアートに興味のある方ということで選ばせていただいたので、何かひとつ、決まった感というか、ちょっといい形になりましたのでは、という反省がありました。

三ツ木 「書」の対話型鑑賞というのは、私から見ると簡単ではないんです。V.T.S.、対話型鑑賞というのは、美的発達段階とあって、人が絵画などの美的なものを見たときにどのように見て考えるのかという研究をもとに開発されています。鑑賞者というのは5段階あると言われていて、第1段階の初心者、物語を作る性質がある、とされるんです。見ているものを物語として捉える。第2段階になると、自分の知っていることからロジックを組み立てようとする。「ここがこうなっているから、こうなんじゃないか」という感じですね。実は、美術館に来る方の85%が、1と2の段階と言われています。

留学生の方は「ほら」とか、絵画でいう造形的な特徴を語っていました。通常あるような言葉はなかなか出てこないんです。例えば、日本人は印象派の作品が大好きなのですが、対話型鑑賞をするのは難しい。1・2段階の人は、物語を見出そうとしている、自分の経験や知るところから推測するので、印象派の絵画について、「色がきれいだ」「くらいのことが言えて

も、その美しさをそれ以上に言葉で説明することは簡単ではない。抽象的な「書」で、しかも文字ではなく「美的な線」として感じましょう」と言っても、どう言えよいか難しいですね。先ほどお話しした三ツ木の質問の最初、「何が起きているんですか？」は作品の中に物語を見るように考えられた質問ですが、それでは答えられないと思います。

土橋 そうですね。それは何か違いますね。

三ツ木 動画を見せていたのに「なるほどな」と思ったのは、土橋さんが「これを文字として読むのではなくて、作者になったと思って、どんなふうに書いたのか、想像して見てみましょう」とおっしゃったじゃないですか。目から鱗と言いますか、そういうふうに書を見ていいんだ、と。どう見たいのかということ、あの対話型鑑賞ではちゃんと参加者に伝わったので、あれだけ言葉が出てきたと思うんですね。

留学生の方は「ほら」とか、絵画でいう造形的な特徴を語っていました。通常あるような言葉はなかなか出てこないんです。例えば、日本人は印象派の作品が大好きなのですが、対話型鑑賞をするのは難しい。1・2段階の人は、物語を見出そうとしている、自分の経験や知るところから推測するので、印象派の絵画について、「色がきれいだ」「くらいのことが言えて

も、その美しさをそれ以上に言葉で説明することは簡単ではない。抽象的な「書」で、しかも文字ではなく「美的な線」として感じましょう」と言っても、どう言えよいか難しいですね。先ほどお話しした三ツ木の質問の最初、「何が起きているんですか？」は作品の中に物語を見るように考えられた質問ですが、それでは答えられないと思います。

土橋 そうですね。それは何か違いますね。

三ツ木 動画を見せていたのに「なるほどな」と思ったのは、土橋さんが「これを文字として読むのではなくて、作者になったと思って、どんなふうに書いたのか、想像して見てみましょう」とおっしゃったじゃないですか。目から鱗と言いますか、そういうふうに書を見ていいんだ、と。どう見たいのかということ、あの対話型鑑賞ではちゃんと参加者に伝わったので、あれだけ言葉が出てきたと思うんですね。

留学生の方は「ほら」とか、絵画でいう造形的な特徴を語っていました。通常あるような言葉はなかなか出てこないんです。例えば、日本人は印象派の作品が大好きなのですが、対話型鑑賞をするのは難しい。1・2段階の人は、物語を見出そうとしている、自分の経験や知るところから推測するので、印象派の絵画について、「色がきれいだ」「くらいのことが言えて

も、その美しさをそれ以上に言葉で説明することは簡単ではない。抽象的な「書」で、しかも文字ではなく「美的な線」として感じましょう」と言っても、どう言えよいか難しいですね。先ほどお話しした三ツ木の質問の最初、「何が起きているんですか？」は作品の中に物語を見るように考えられた質問ですが、それでは答えられないと思います。

土橋 そうですね。それは何か違いますね。

三ツ木 動画を見せていたのに「なるほどな」と思ったのは、土橋さんが「これを文字として読むのではなくて、作者になったと思って、どんなふうに書いたのか、想像して見てみましょう」とおっしゃったじゃないですか。目から鱗と言いますか、そういうふうに書を見ていいんだ、と。どう見たいのかということ、あの対話型鑑賞ではちゃんと参加者に伝わったので、あれだけ言葉が出てきたと思うんですね。

留学生の方は「ほら」とか、絵画でいう造形的な特徴を語っていました。通常あるような言葉はなかなか出てこないんです。例えば、日本人は印象派の作品が大好きなのですが、対話型鑑賞をするのは難しい。1・2段階の人は、物語を見出そうとしている、自分の経験や知るところから推測するので、印象派の絵画について、「色がきれいだ」「くらいのことが言えて



土橋 日本の古美術研究家で皇居三の丸尚蔵館館長の島谷弘幸先生が「書は読めなくていい。でも読めたらもっといい」とよくおっしゃっているんです。けれど、書展で「ああ、これ面白いな」と足を止めた作品があったり、あ何かが書いてあるんだろう、じゃあ何が書いてあるんだろう、と。そういう形になってくれればうれしいと思います。私自身も構図とかイメージとかを大事にしていますので、そこから、皆さんが何か感じてくださるといいなと思います。

三ツ木 何が書かれているか分からないままに見て、感じたことを語るといって対話型鑑賞もいいですが、こういう字義をもった言葉がこんなふうに表現されている意味は何だろう、と考えることもできます。次のステップになりますが、少し高度なので、鑑賞時間もたっぷり取らないといけないでしょうが、そういう可能性もあるなと思います。

土橋 確かに、書は専門性が強いので、自分とかけ離れているものは、自分自身で難しいと思うんですけど、自分自身で難しいと思

つてしまふ部分もあるかもしれません。対話型鑑賞のような機会を得て、視野を広げたり、違いを尊重したりする。違いを感じて、理解して、そして尊重し合うというのが、何か大きな課題なのかと思います。

最近、音楽の対話型鑑賞も手をつけておられるようですが、三ツ木 絵画や書は、ひとめで見られますが、音楽は、演奏されていくという「時間芸術」ですから、ぱっと見て全体像が分かるものではないですし、聴いていくうちに流れていってしまします。そこで、ホワイトボードにタイムラインを書いて、出てきた言葉を時間軸に基づいて書き留めながら、曲の変化を思い出し、話をしていく、というようなことをしています。「さっき言っていたところ、もう一度聴いてみようか」と繰り返して聴くことで、自分が気が付かなかった意見を理解することができそうです。また新しい意見が生まれてきます。対象が違うと方法に工夫が必要ですね。

土橋 書には、音楽的要素と絵画的要素があると思っています。何回も書き直しはするんですが、その1枚は一回限りのもので、その瞬間で終わってしまう。絵画のように2次元で表現するが、その紙はそれで終わってしまう。私は、縦横の形だけじゃなくて、勢いがある、奥行きがあって、リズムがあって、時間がある、という、それが書だと思っています。2次元の中に3次元、4次元のものを表現したいんです。なので、よく「ここは前に書いた方がよかったけれど、ここは今書いた方がいい」とか、そんなことになってしま

土橋 確かに、書は専門性が強いので、自分とかけ離れているものは、自分自身で難しいと思

まっんですけど。

三ツ木 書の作品は、書き順があって、筆の運びがあって、時間のプロセスが見えやすいですね。だから作者がどう書いたのかイメージしやすいんじゃないでしょうか。どれくらいの時間で書かれるのか分かります。30秒とか1分とかの時間が、そのまま形になっている。だから追体験ができるんですよ。絵画だと、どこから始まってどうなったかのプロセスは分かりませんが、そのプロセスを見る側が想像できるのは、書だからこそ、ですね。

土橋 追体験とか、プロセスを想像してみようか、ということ、ポイントにすれば、書の対話型鑑賞も形になる、開催できるということですね。

三ツ木 今日、こういう機会をいただけて、私自身、書がどういふものか、よく分かっていなかったなと改めて思いました。文字の内容よりも、文字そのものが重要なんだと分かっただけで、とても自由に書が見られるなと思います。お手本のように書けないということを抱いた苦手意識から解放されて、そういう自由度があるんだしたら、絵は描けないけれど、書で自分を表現してみようと、興味を持つ人も現れるんじゃないかと思

土橋 書に対する見方というか、感じ方、受け止め方が少しでも開かれたらいいと思うんです。書に開いている人だけでなく、いろいろな方が興味を持ってくださるようになればうれしいですね。

本日はどうもありがとうございました。

大阪・関西万博

日本の「SHODO」世界へ発信

「未来へつなぐ日本の書」

大阪では1970年以来55年ぶり、国内では、2005年の愛知万博以来20年ぶりに開催された、2025年日本国際博覧会（大阪・関西万博）。大阪市此花区の会場には、のべ約2560万人が訪れ、昨年10月に開幕しましたが、日本書芸院は、同年5月、日本の書を世界の「SHODO」にしようと、オールジャパンの本格の書を世界へ発信する

イベント「未来へつなぐ日本の書」空・海・時を超えて」（読売新聞社共催、日本書道文化協会特別協力）を5日間にわたって実施しました。期間中、2万5000人を超える来場者が訪れ、一流書家の作品展示や、書家による席上揮毫、最新技術を駆使した書の展示・体験などを楽しみ、書の魅力に触れました。

来場者数 2万5000人超 魅力伝えた 5日間

「未来へつなぐ日本の書」は、万博会場内の催事施設、「EXPOメッセ WASSSE」で、5月7日から11日まで開催されました。初日の開会式では、土橋靖子理事長があいさつし、「国内はもとより多くの外国からのお客様にも見て、体験していただき、書の魅力をじかに感じていただければと思っています。そして、その誇るべき日本の書が世界の書道へと羽ばたき、広く未

来へつなぐことを切に願います」と話しました。続いて、土橋理事長、中村伸夫副理事長、田中徹夫常務理事が席上揮毫を披露。土橋理事長は、イベントのサブタイトル「空・海・時を超えて」などを揮毫し、書道のこれからへの希望を込めて力強く筆を走らせていました。

役員による席上揮毫は期間中、毎日行われましたが、9日には、真鍋井蛙常務理事が篆刻会を開催。万博



篆刻会を開催した真鍋常務理事

また、会場に再現された和室には、掛け軸や屏風、衝立などを配置。文化勲章受章者の井茂圭洞先生、文化功労者の黒田賢一先生（いずれも日本書芸院最高顧問）、高木聖雨先生（全国書美術振興会理事長）、杭迫柏樹先生、吉川蕉仙先生、真神薔堂先生（いずれも日本書芸院名誉顧問）の作品が飾られ、訪れた人たちは、書で演出された空間で、精神性や美しさを体験しました。

このほか、うちわやタンブラーなどに文字を書き、手書き文字のすばらしさを体験するワークショップ、書芸院の役員が、参加者と対話・解説しながら、会場に展示した自身の作品を鑑賞してもらう「対話型鑑賞会」、協賛企業による、文房四宝（筆・墨・紙・硯）の製作実演や、四国大学、帝京大学の学生たちによる書道パフォーマンスの披露などがあり、書の楽しさと魅力を多くの人に伝えるとともに、日本書道の、国連教育・科学・文化機関（ユネスコ）無形文化遺産登録が大詰めを迎える中、世界に「SHODO」をアピールする機会になりました。



多くの来場者でにぎわった会場



（右上から時計回りに）和室展示、「水書にチャレンジ!」、エア書道「空書招来」

紙とデジタル融合の記録集

二次元コードで映像も

日本書芸院では、このイベントの記録集「明日への記録—世界のSHODOへ—」を制作しました=写真=。臨場感あふれる写真に加えて、誌面の二次元コードを読み取ることで関連する映像もご覧いただける、紙とデジタルが融合した新しい形の記録集です。



© EXPO 2025 大阪・関西万博公式ライセンス商品

A4判、フルカラーの208頁。会場に展示された、文化勲章受章者、文化功労者、日本書芸院会員をはじめ、会派や団体の垣根を越えた、日本を代表する書家による作品のほか、「王道の書」と最新のテクノロジーが融合した多彩な企画の記録を収録しています。プレイイベントでの席上揮毫の様子も収められています。

誌面に掲載できなかった作品もインターネットの専用ページに掲載しており、二次元コードを使って専用ページに接続、閲覧していただくことで、すべての展示作品をご覧いただけます。

1冊3300円（税込）。送料は1冊500円（同）。2冊以上は、同一宛先への一括送付の場合、1000円（同）。異なる宛先への発送は、それぞれ冊数に応じた送料がかかります。

問い合わせは、日本書芸院へ、電話（06・6945・4501）または電子メール（info@nihonshogeiin.or.jp）で。

第21回手書き文字ばんざい!

書の楽しさ 感じて



手書き文字を通して書の楽しさと魅力に触れる「第21回手書き文字ばんざい!」が、令和7年10月25日、大阪市中央区のOMMビルで行われました。今年のテーマは「書くよろこび」心をとめて伝えよう」で、幼児から大人まで約200人が参加。臨書や寄せ書きをしたり、思い思いの文字や心に浮かんだ言葉などを書いて令和8年のカレンダーを作ったりして楽しい時間を過ごしました。

思い思いにカレンダー作り

最初に、第79回日本書芸院展で魁星作家に選ばれた野田岳豊さんが登場。大作揮毫を行いました。参加者が周囲に集まって見守る中、今回のテーマにちなんで、「心輝かせて楽しく挑戦」

と、力強く書き上げました。野田さんは「今日の会場がこんな雰囲気になればいいな」と思って書きました。作品を書いていると、緊張することも、苦しくなることもあります。そ

手書き文字ばんざい!
読書週間初日の10月27日が「文字・活字文化の日」に制定された2005年、本院と読売新聞社が始め、毎年10月に開催している。

中でも、心の中のように書いて筆を進めています。みなさんも、楽しんで、挑戦してもらえればと話しました。続いて、主催者を代表して、日本書芸院の山本悠雲・副理事長があいさつに立ちました。山本副理事長は、書く前に一度、天井を見て、指で書いてみる。それから筆をしっかりと持ち、墨をたっぷり付けて姿勢を正し、書くことよと思えます。書は人に感動を与える芸術です。みなさん、頑張ってください」とアドバイスしました。続いて、同院の木村通子・常務理事・手書き文字部部長が「筆で書いた文字には、それぞれに個性があつて楽しいものです。今日は、書くことの楽しさを感じていただき、筆で書くことに親しみを持って、それを続けていっ

ていただければうれしいです」と呼びかけました。このあと、参加者は会場に展示する色紙の作品制作に取り組みました。テーマに沿った仮名「つなぐ」よろこびや、「愛」「友」「想」といった漢字の手本から好きな文字を選んで筆を持ちました。子どもたちは、保護者からアドバイスを受けたり、「一緒に参加した書道教室の先生や友だちに作品を見せて意見を聞いたりして、清書作品を仕上げました。作品の展示コーナーでは、貼り出された自分の作品の前立って、記念撮影をする姿も見られました。初めて参加し、中国・清の書家、呉大激が書いた「書」の文字を選んだ小学校3年生の「井啓秀君は「めずらしい形の字だったので選びました。書くことが楽しいので、習字の授業は大好きです」と笑顔で話し、母親の美紀さんも「本人が好きそうなので、1年生の頃から習っています。書道は一生続けられるのがいいですね」と話していました。また、4回目の参加という6年生の河中大和君は「好きな漢字をたくさん書けるのがいいです。うまくかけると達成感があります。もっと上達したいと思います」と話しました。姉妹で参加した、5歳の近藤美光子ちゃんは「よろこび」を選び「簡単そうだったので、初め



て書いてみました。楽しかった」と、少し恥ずかしそうに話し、「友を書いた姉の小学2年生、美代子ちゃんは習ったばかりの文字だったので書きました。いっぱい練習してうまくなりたいので、いつも妹と一緒に書いています」と掲示された自分の作品をうれしそうに見つめていました。

作品を書き上げた参加者は、上半分が白紙になった令和8年のカレンダーに、墨や絵の具を使って文字や言葉、イラストなどを描き込んだ作品づくりを楽しみました。また、会場の後ろに設けられた大型ボードの寄せ書きコーナーでは、子どもたちが筆やクレヨンなどを使って、来年の干支にちなんだ「馬」や「こころ」「書道最高」など、思い思いの文字や言葉を記入。中には「万博」や「ミヤクミヤク」といった、今回ならではのものもありました。このほか、いろいろ歌などをなぞり書きする「街なか書道体験」のコーナーもあり、多くの人が挑戦していました。最後に、同院の藤川翠香・

手書きの文字
書写・書道ってすばらしい
きれいに美しく
字を書こう
の美しさは
文化のバロメーター

【主催】公益社団法人日本書芸院、読売新聞社
【後援】文部科学省、大阪府教育委員会、大阪市教育委員会、読売テレビ
【協賛】あかしや、呉竹、サクラクレパス、ゼブラ、トンボ鉛筆、ぺんてる、墨運堂 (50音順)



令和7年 全国シルバー書道展

作品発表 心を活性化

高齢化が進展する中、シニア世代の人たちに、筆を手にして表現する楽しさを知り、生きがいにつなげてもらおうと、令和7年の「シルバー書道展」が、大坂、京都、滋賀など西日本の2府7県で開催され、多くの書道愛好家らが訪れました。その中で、全国で有数の長寿県・滋賀で開催された書道展を紹介します。



力こもった 筆遣い

滋賀展

第38回滋賀展は、令和7年4月11、13日の3日間、大津市歴史博物館（大津市）で開催されました。出品者は、計164人（男性31人、女性133人）。このうち、80歳代のは45人、90歳以上の人は9人。同4年に厚労省が公表した「令和2年都道府県別生命表」で、平均寿命が男性全国1位、女性が同2位となった長寿県にふさわしく、シルバー世代の中でも高齢層の方々

が出品していました。



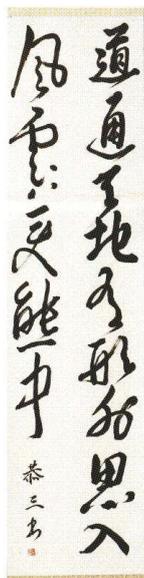
私たちは「日本の書道文化」のユネスコ無形文化遺産登録を応援しています。

最高齢出品者は、男性が、いずれも96歳の竹山秀諦さんと若松恭三さん、女性は94歳の大塚田つさんでした。竹山さんは、聖徳太子の伝記「上宮聖徳法王帝説」から「世間ハ虚仮ナルモ唯仏ハ是真ナリ」と端正な筆致で書きました。また、若松さんは、北宋時代の儒学者・程明道の詩「秋日偶成」の一節「道通天地有形外 思入風雲变态中」を、力こもった筆遣いで書き上げました。一方、大塚さんは、芭蕉の句「首を流麗に記しました」。

会場には、書と向き合い、丁寧に書かれた漢字や仮名、調和の力作が並び、家族と出品作を見に来た人たちが、書道教室に通う仲間たちと訪れ、作品を真剣なまなざしで見つめたり、感想を述べ合ったりする人たちがにぎわいました。

また、同じ会場で、幼稚園児

から小・中・高校生と一般からの応募作品を展示する滋賀書作家協会主催の「滋賀読売競書大会」、同協会会員の作品を集めた「会員展」「公募展」もあわせて開かれ、訪れた人たちは、しっかりと基本を学んだ子どもたちの作品などを鑑賞していました。



若松恭三さん(96)の作品



竹山秀諦さん(96)の作品

熱心に出品作を鑑賞する来場者

第38回広島展	1月10日(土)~11日(日)	広島県民文化センター
第39回京都展	3月6日(金)~8日(日)	京都文化博物館
第39回滋賀展	5月1日(金)~3日(日・祝)	大津市歴史博物館
第39回大阪展	5月26日(火)~31日(日)	大阪市立美術館
		天王寺ギャラリー
第38回奈良展	9月4日(金)~6日(日)	奈良県産業会館展示ホール
第39回岡山展	9月15日(火)~20日(日)	岡山県天神山文化プラザ
第39回兵庫展	10月24日(土)~25日(日)	岡田の森ギャラリー
第40回三重展	12月16日(水)~19日(土)	三重県文化会館

令和8年(2026年)「全国シルバー書道展」

伝統と創意

創立80周年 公益社団法人 **日本書芸院**

■ 展覧会・審査会

- <日本書芸院展>
日本書芸院会員相互の共励琢磨による「書」の本質的研究を通して、後進の育成に尽力しています。
- 日本書芸院展(役員・役職者展) 会場：大阪国際会議場(大阪市北区)
- 日本書芸院(三月審査会) ※作品集とホームページに作品を掲載します。
- <その他の展覧会・審査会>
小学生からシルバー世代まで、全世代を網羅する書道展を開催し、書の啓蒙と普及、我が国文化の継承・振興・発展のために活動しています。
- 全日本小学生・中学生書道紙上展 小中展新聞紙上
- 全日本高校・大学生書道展 会場：大阪市立美術館天王寺ギャラリー (大阪市天王寺区)
- 全国大学書道パフォーマンス大会 会場：グランフロント大阪北館1階 (大阪市北区)
- 全国シルバー書道展 近畿2府4県および三重・岡山・広島県で開催

■ 講習会

- 教養講座
- 記念講演会
- 「手書き文字ばんざい！」 (文字・活字文化の日記念イベント)

■ 出版

- 作品集・図録・DVD
- 会報
- 研究誌・記念誌
- 広報紙
- 小中展新聞

広報紙「書くよろこび」を無料でお届けします

「書くよろこび」は、書くことのよろこびや楽しさを広く一般の方にアピールし、書写書道のより一層の振興と発展を目的とした無料の広報紙です(年1回発行)。書道教室や部活動、展覧会場など、書や文字に関する様々な場面で配布、活用していただいています。送料無料でお届けいたしますので、ご希望の部数と送付先を日本書芸院事務所へお申し込みください。お待ちしております。



■ 沿革と概要

- 昭和21年(1946年)11月創立
- 昭和22年(1947年)5月、社団法人の認可を受ける
- 平成22年(2010年)6月、公益法人制度改革により、内閣府から公益社団法人の認定を受ける
- 令和8年(2026年)創立80周年
- 現在、北海道から沖縄まで全国に約8100人の会員を擁する我が国屈指の書道団体であり、会員の中から、文化勲章受章者4名(故村上三島、故村岡華邨、故高木聖輔、井茂圭河)をはじめ文化功労者、日本藝術院会員、日本藝術院賞受賞者、日展や読売書法展など全国規模の大公募展の役員・審査員を務める著名な書道芸術家を多数輩出しています。
- 毎年、公募を含めた書展や企画展、各種の講習会・講演会を開催しています。